親子の情緒的結びつきと介護責任との関連

○小野口航¹・福川康之²

(¹早稲田大学大学院文学研究科・²早稲田大学文学学術院)

キーワード：介護責任・親子間関係

The relationship between parent-child emotional bond and filial responsibility.

Wataru ONOGUCHI¹, Yasuyuki FUKUKAWA²

(¹Waseda University, ²Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University)

Key words: filial responsibility, parent-child bond

目的

従来、日本は男性長子に老いた両親の介護責任があるとする長男扶養規範が強い国とされてきた。しかしながら、近年の我が国の社会構造の変化や少子高齢化の進展は、子供が抱く老親への介護責任感が、出生順位のみならず、親子関係の心的距離によっても規定される余地を生じさせるようになっている。

そこで本研究では、親子の情緒的結びつきと介護責任感との関連について検討を行った。

方法

- 対象：都内の私立大学の男女学生124名に調査を行い、(1) 一人ないし二人のきょうだいがいること、(2) データに不備のないこと、の2条件を満たす99名（男性47名、女性52名：平均年齢20.3±0.9歳）を分析対象とした。
- 調査内容：
 - (a) **出生順位** 調査対象者が長子である場合を1、長子でない場合を0として指標化した。
 - (b) **介護責任者** 「将来、親の介護が必要になったとき、だれが介護をするべきだと思いますか」と尋ねた。「自分（対象者自身）」と回答したものを1、その他（「きょうだい」「その他の家族」「家族以外の公的機関や施設」と）回答したものを0として指標化した。
 - (c) **老親扶養意識** 實金ら（2010）の作成した簡易版東アジア圏域用老親扶養意識測定尺度（8項目5件法）の合計得点を用いた。
 - (d) **親子の情緒的結びつき** 子ども（対象者自身とそのきょうだい）が父母の気持ちをどの程度受け入れていると思うかを4件法で尋ねて「受容感」を測定した。そのうえで、対象者が他のきょうだいよりも父母を受け入れているものを受容感高群（1）、そうでないものを受容感低群（0）に分類した。反対に、子ども（対象者自身とそのきょうだい）の気持ちが父母にどの程度受け入れられていると思うかを4件法で尋ねて「被受容感」を測定した。そのうえで、対象者が他のきょうだいよりも父母に受け入れられている場合を被受容感高群（1）、そうでない場合を被受容感低群（0）に分類した。
- 分析：介護責任者を目的変数とする多重ロジスティック回帰分析を行った。出生順位、被受容感、および両者の交互作用項を説明変数とするモデル（モデル1）、および、出生順位、受容感、および両者の交互作用項を投入したモデル（モデル2）の2つのモデルを検討した。いずれのモデルにおいても性別と老親扶養意識を投入して効果を調整した。

結果

結果を Table 1 に示す。モデル1 では、被受容感の主効果および被受容感と出生順位の交互作用のいずれも有意ではなかつた。

これに対してモデル2 では、受容感と出生順位の交互作用が有意となった。そこで下位検定を行ったところ、長子群では受容感の有意な効果は認められなかった。他方、非長子群では、介護責任に対する受容感の効果が有意傾向を示し（OR = 3.21, 95%CI = [0.89-13.04], $p < .10$ ）、受容感が高い対象者は、自身に介護責任があるとみなしやすいことが明らかとなった（Figure 1）。

Table 1 多重ロジスティック回帰分析の結果

説明変数	モデル1	モデル2
	推定値(SE)	推定値(SE)
老親扶養意識	0.13(0.05) **	0.16(0.05) **
性別(女性)	0.13(0.44)	0.30(0.47)
出生順位(長子)	1.04(0.55) +	2.02(0.64) **
被受容感(高群)	-0.29(0.65)	
受容感(高群)		1.24(0.65) +
出生順位 × 被受容感	-0.30(0.93)	
出生順位 × 受容感		-2.48(0.98) *

** $p < .001$, * $p < .05$, + $p < .10$

Figure 1. 出生順位と受容感との交互作用

考察

本研究から、老親介護を規定する心理的要因は、子が親に受容されているか（被受容感）よりも、子が親を受容しているか（受容感）が重要である可能性が示唆された。先行研究においては、老親扶養が、親の投資に対する返報行動と解釈できることが指摘されている（Silverstein et al., 2012）。成人期の初期段階にあり、親からの一定の自立を遂げた大学生世代においては、親から受けるサポートではなく、親へのサポートに基づいて情緒的結びつきを形成しつつあり、このことが、介護責任感にも反映されているといえるかもしれない。しかしながら本研究では、このような親子関係の情緒的結びつきの効果が非長子群にのみ認められた。また、出生順位の主効果（長子であることが介護責任を強める効果）も認められたことから、本研究の結果は、現代の我が国の介護意識においても、旧来の家父長的な制度意識が根強く残っていることを示唆するものといえるだろう。